



第一回 DoCoMo“ケータイ空間”デザインコンペで優秀賞

広島工業大学大学院 環境学研究科 修士課程

地域環境科学専攻1年 植田 開(左)

地域環境科学専攻1年 植田 瞳(右)

第一回 DoCoMoケータイ都市デザインコンペとは

今回私たちが応募したDoCoMo“ケータイ空間”デザインコンペは、今年初めて開催され、国内外を問わず建築設計の道を志す学生、設計事務所、ゼネコンの設計部など第一線で活躍する人々から多大な関心を持たれていました。審査員には日本建築界の権威ある諸先生が招かれ、また課題も現代における携帯電話と都市や建築の問題を捉えた自由で夢のあるユニークなもので、プロ・アマチュアを問わず海外にも応募作品を求め、国際色豊かなコンペになっています。

第一回目は、「ケータイ都市」をテーマに2005年10月に開催されました。審査では、応募作品総数530点(日本を含めて全34カ国)のうち最優秀賞1点、優秀賞2点、入賞7点が選ばれ、私たちは優秀賞をいただきました。

コンペティションへの挑戦

私たちが建築を学び始めた大学2年生頃から、毎年多くの建築コンペが開催されており、自分たちも全国の建築を志す学生と力を競い合っていたという思いや、さらなる理論の構築、表現力の向上といった目的から、あらゆるコンペに応募してきました。私たちのゼミ(村上徹研究室)では普段から応募し続けているので今回のコンペへの応募もごく自然な流れでした。

しかし、それだけ作品をつくっていても賞をいただいた事は殆どありません。ですから、結果通知が手元に届

いたときは内容を読むまで落選通知だとばかり思っていました。

「ケータイ都市」への提案

私たちは設計活動をする際、建築と周辺の環境との関係に配慮しています。普段、私たちが暮らしている街はたくさんの建築や場所が集まってできています。

しかし、生活スタイルのグローバル化を求めた20世紀を経て、21世紀における現代の街は、どこを見ても同じような建物や場所の集まりのように感じてしまいます。これは、都市域においてならば、ほぼどこでも携帯電話が使用可能になったこととも関連していると考えています。

今回のコンペのテーマは、こういった状況の中で携帯電話と生活のあり方を提案し、豊かな街の創造を目指すというものでした。



審査風景
左より 西沢 立衛 隈 研吾 永田 清人 青木 淳

私たちの「ケータイ都市」

Palette city

現在、ケータイの普及率は80%へ達しました。使用可能エリアは、都市域であればほぼ100%がカバーされ、現代人の行動を左右するほどの重要

なツールになっています。そこで、建築物の軒下を起点とした圏外エリアを街に散在させました。常にケータイが使用可能な環境において、電波の有無は新たな場所性を構成する要素の一つになると考えています。これによって、街中に散在させた圏外エリア(ケータイに影響されない生活空間)の存在を感じ取れるようになります。

そこでは、かつて私たちが木陰の心地よさを自然に感じ取り、その環境に応じた行動をとっていたように、最近の都市ではなかなか目にすることができなくなっていたアクティビティが起こると考えています。

そういった物事の集積による新たな都市風景の創出を目指しました。

表彰式にて

会場では、審査をしていただいた先生方をはじめ出版の方や、今回の主催であるDoCoMoの商品開発部門の方とお話することができ、大変有意義な時間を持つことができました。また、受賞された他大学や企業の方たちとは、作品をつくる過程や考え方について議論を交わすといった場面もありました。

また余談ではありますが、表彰式への移動の途中や会場周辺の有名な建築を見学できたことも勉強になったと考えています。

今後に向けて

現在の街は物で溢れ、刺激に満ちています。しかし固有性に欠けた均質な都市空間で日本は飽和状態にあります。

今こそ人々の生活の豊かさ、場の固有性が求められているのではないかと思います。

そういった中でどのような建築設計を行うべきか、今回のコンペはそういった事の方向性の一つを示していると考えています。

感想(植田 開)

今回運良くこういった評価を頂きましたが、内心では殆ど意味のないこ

とだと考えております。事実、実際の建築設計は経験がなく、今の自分はそのための具体的な技術を殆ど持ち合わせておりません。

まだまだ自分はこれからであり、日々努力していきたいと考えています。

まずは、賞金でゼミのコーヒーカップを新調しようと思います。

感想(植田 瞳)

私たちの作品がこのように評価さ

れたことは、自分自身の根本的な考えを肯定されたようで、自信が湧いてきました。しかしそれは、アイデアや表現力に留まります。ものづくりはそれだけでは足りないように思います。ですから、まだまだたくさんを学んでいながら、毎日を大切に過ごしたいと考えています。そしてここに至るまでに関わった全ての方々に感謝しております。

優秀賞 植田 開+植田 瞳「Palette city」

